

互助×ICTを活用した持続可能な多世代型の支え合える地域作り 天理市 × みまもりあいプロジェクト

取組概要

天理市、医療法人健和会、一般社団法人セーティネットリンケージが、認知症高齢者及び身体的虚弱高齢者の迷子、孤独孤立、掃除・買い物など軽微な日常生活課題等を解決するために連携。ICTを活用して行方不明発生時の協力者を子育て世帯に広げて多世代型の見守りを実現、また地域ボランティアとのマッチング等を実現することで、日常生活課題解決に繋げて孤独孤立を予防し、できる限り住み慣れた地域で生活し続ける環境を作る



持続可能な見守り合う・支え合う循環の実現

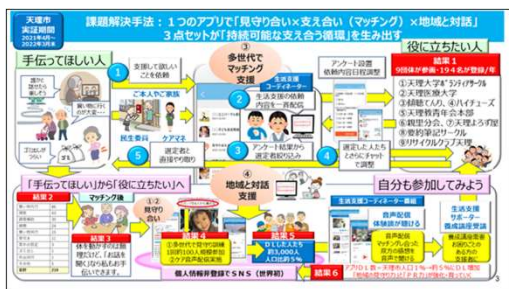


見守り合い×支え合いの事例

基本情報

代表地方公共団体	天理市
代表民間団体	みまもりあいプロジェクト
他の連携団体等	①天理大学ボランティアサークル②天理医療大学③傾聴てんり④ハイチユーズ⑤天理教育青年会本部⑥親里分会の天理よろず屋⑦要約筆記サークル⑧リサイクルクラブ天理
カテゴリ	行政サービス・手続き／高齢者福祉・介護／地域情報・行政情報発信
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	2021年4月～2022年3月末まで、実証期間1年間

取組内容



課題解決手法と実証期間内の成果



互助をICTがサポートする地域づくり事例

この取組で解決した課題	人口減少と高齢化の課題を有する天理市の現状は人口約6.2万人（令和4年2月）、要介護等認定者数3649人（人口割合21.5%＊全国平均18.9%/令和2年）、「支える側の課題」として、コロナ禍で、「誰かの役に立ちたい気持ち」を持ったボランティア団体や個人が繋がり先がなく活動が減少しつつある。また「支える側の課題」として、認知症高齢者及び身体的虚弱に陥った高齢者（介護保険サービスに至る前の制度の狭間にいる高齢者）による3つの課題「①迷子による行方不明発生時の早期発見、②望まない孤独孤立等引きこもり予防、③掃除・買い物や家具運搬などの介護保険サービスに至らない日常生活の課題」が存在しており、これら3つの課題を支える側の地域互助とICTの力を借りて「持続可能な支え合いの仕組み」を実現する必要がある。
解決に向けた手法	天理市が制度設計を担い、健和会が生活支援コーディネーター（以下SC）によるボランティアとのマッチング業務を担い、当社がアプリを使って「①見守り合い②支え合い（マッチング）③地域と対話」を包括的に支援致しました。具体的には①アプリは「アプリをDLすることで検索協力者の1人になれる仕組み」が備わっており、市内で見守り訓練を実施し、子育て世帯を巻き込みDLを増やし、②マッチング業務は、SCとボランティアとの連絡調整業務をアプリを使って業務の効率化を実現し、③効率化で生まれた時間を、DL者にアプリを使って地域との対話活動に注力できるようにしました。これにより「持続可能な見守り合う・支え合う・地域と対話し合う循環」を実現して以下の成果を得る。協力者を約3000DL/年・人口比5%＊参考：公式LINE登録者約2000、ボランティア登録者194人/年＊参考：モデル自治体の登録者約400人/4年。

取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	○天理市：地域ボランティア団体と生活課題を抱える高齢者とのマッチングによる支援体制の確立。多世代型の見守り体制構築を目指して、子育て世帯を巻き込んだ検索模擬訓練を実施（子育て世帯へのアンケート実施）。○健和会：生活支援コーディネーターの配置により、ボランティアとのマッチング業務で中核的な役割を担う。○当社：「地域共生支援アプリ」と「管理システム」の開発・運営保守・アプリや訓練の運営支援を担う。
地域関係者との連携方法	市内に、大学及び医療大学が存在していることから若年層を取り込み多世代の支え合い体制を目指した。既存のボランティア団体の月例集會にSCが参加し、本事業の説明を行った。また、大学教授やボランティアサークル顧問、学生にも授業や個別講座を通して事業を説明。学生の巻き込みに成功し、10代から80代の担い手の確保に至った。他にも検索協力者増を目的に、子育て支援団体のイベント時に検索訓練をゲーム形式で実施した。
資金調達方法	非営利団体である当社のICTを活用した見守り活動に対して、健和会様から「天理市を互助×ICTを活用した見守り合える町」にしたいという思いで資金支援を頂き、実現するに至る
資金調達方法の補足	マッチング業務を支援する際に、地域と行政の2つの違うSNS空間をICTで効率よく繋ぐ仕組みが求められ、その実現に向けて乗り越えないといけない課題がある中で、構想のタイミングでご支援を頂き実現いたしました。（他にも「地域と繋がること」「互助×ICT」に関心の高い病院や国立大学からご支援頂いています）
事業推進上の課題・工夫	①アプリの特性を活かした体制構築にあたって、天理市のほうで「支えられる側」にいる高齢者でICTを活用できない人がまだ多くいることを想定して、無理に高齢者にICTツールの利用を促すのではなく、従来の窓口になっているケアマネ等コーディネーター役を間に置くことで格差を作ることなく課題をクリア。②「見守り事業」と「マッチング事業」を単独で実施するのではなく、相互に連動させることを想定して「地域との対話」をするための業務を作り、それぞれに携わる担い手を多世代を意識して増加させるよう配慮した。③立ち上げ当初の「ボランティアの支え手不足」という課題に対して「支えられ手」が、傾聴ボランティア・体験談を話す等であれば支え手に回る事ができることが分かり、当事者が体験談を語ってもらうことで、当事者が当事者を支え合う「オンラインピアサポート体制」を準備するに至る。現在、若年性認知症の方による「当事者番組」を配信しています。

担当者のコメント

○【天理市担当者】本アプリの核となる機能は見守りであるものの、他事業での利活用が工夫次第では可能である。様々なサービスがある中で事業間連携にスムーズに対応できるアプリやサービスがあると、本来の目的以上の価値を生み出すことができ活用しやすいと感じた。

○【SC担当者】派遣開始当初はアプリを活用し、支援が必要な方と担い手がマッチングできることは想定していませんでした。若い世代の担い手が多い天理市の特性とも合致した印象です。今後は運用の利点、改善点を模索しながらより多くの方に活用頂き、支え合いの輪を広げていきたいと思います。

○【当社担当】天理市の多世代による見守りの活用と生活支援コーディネーターにマッチング業務でアプリを活用して頂いたことで「業務の効率化」と「地域対話の活用」が確認でき、「持続可能な支え合いの循環」を1年で実現できたことは大きく、同じような地域互助の活用で悩んでいる自治体でも再現が期待できるのではと感じました。



SCと天理市とボランティア登録者

優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<p>（1）地域創生SDGSの視点 認知症高齢者及び身体的虚弱高齢者の迷子、望まない孤独孤立、掃除・買い物など日常生活課題を支援するために、認知症の方の目線で設計された地域共生支援アプリを使って「①見守り合い、②支え合い（マッチング）、③地域と対話」を包括的に支援することで「持続可能な見守り合う・支え合う・地域と対話し合う循環」を実現しました。具体的には、①アプリは「DLすることで検索協力者の1人になれる仕組み」が備わっており、万が一の際には協力者に一斉に助けを求めることが可能です。今回、子供に活用範囲を広げることで多世代型の見守りを実現しました。次に②支え合い（マッチング）はボランティアとの連絡調整業務をアプリを使って効率化し、③生まれた時間をアプリを使って、DL者との対話を実現しました。対話は高齢者に優しい音声配信を使って伝達できる仕組みです。</p> <p>②ステークホルダーとの連携 地元大学との連携（大学教授や学生に説明会を実施して賛同を得る）や検索模擬訓練をゲーム形式にして子育て世帯を巻き込んで実施することで、10代から80代までの多世代型の見守り合い・支え合いを実現。訓練体験頂いたご家族の約86%が「子供の方が一の際ははこのアプリを使いたい」とアンケートで回答頂きました。</p> <p>（3）モデル性・波及性 認知症の方が活用できるように「DL時に個人情報非登録で情報連携すること」を世界で初めて実現。（令和4年「福祉SNS」としてApple・Googleから許可）。互助を活用した見守りに関しては口コミで約120万人（日本人口の1%）の方がDL頂き、早期発見に貢献頂いており、今回天理市との「マッチングと地域との対話支援」を組み合わせることで1年で人口比5%までアプリDLが拡大し、ボランティア登録者も多世代で194人の登録を実現。DLが増え続けることで地域の見守りと対話力が強化されていきます。</p>
----------------	--